

# 和泉国大野寺土塔の源流

## 一、雁塔の名の由来

慈恩寺の大雁塔（七層、博造、唐代）は鐘樓（三層、木造、清代）とともに西安（古都長安）の看板とされており、西安に旅行すると、旅行社の係はツアーの客を先ず鐘樓と大雁塔に案内する。西安を紹介するパンフレットにも、鐘樓が表紙に、大雁塔が裏表紙に美しいカラーで印刷されている。鐘樓は西安の中心部にあり、ここから東西南北に街路（東大街・西大街・南大街・北大街）が走っており、大雁塔は鐘樓から南南東の方角に建てられていて、西安駅からならば解放路をまっすぐに南進し、平和門を過ぎ、雁塔路を南に約四キロ進んで突きあたるところが慈恩寺である。鐘樓や大雁塔にのぼって西安の市街や郊外をながめると、その景色はすばらしい。鐘樓と大雁塔は西安の史跡・名所であるほか、この頂上からはかの史跡や名所を遠望することができる。

慈恩寺は唐の第三代の天子高宗（六四九―六八四、在位）がまだ皇太子であったとき、母の文徳皇后の冥福を祈りその恩にむくいるため、

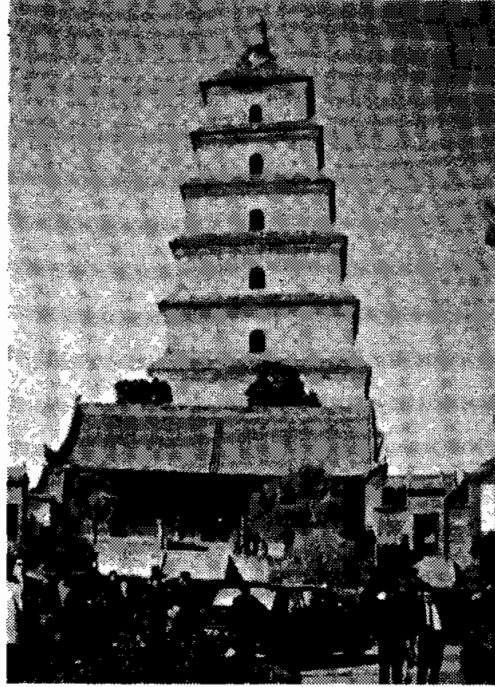
## 井 上 薫

貞観二十二年（六四八、日本の大化四年）に隋代の廃寺を復興して建てた寺であり、建立の趣旨によって慈恩寺と名づけられた。

玄奘（六〇二―六六四）は貞観三年（六二九、舒明天皇元年）仏教研究のためインドへゆく決心をして長安を脱出し、シルクロードの西域などを進んでパミール高原を越え、インドに入り、各地で仏教を学び、仏像や經典（六五七部）をたずさえて貞観十九年（六四五）長安に帰った。この年は大化元年にあたる。

玄奘は弘福寺で經典を漢文に翻訳することに精励していた。高宗は玄奘を慈恩寺に迎え、玄奘の翻譯事業を支援し、翻經院を設けた。玄奘はインドから持ち帰った經典を保存・収納するために塔を建てる必要を高宗に説き、永徽三年（六五二、白雉三年）慈恩寺に五層の塔を造った。それが大雁塔であるが、創建後まもなく七層の塔に改められ、高さ約六四メートルで宝形造りの形を呈している。

大雁塔の形は空を飛ぶ雁に似ているわけでもないのに、なぜ大雁塔という名がつけられているのか。それは、玄奘がインドの摩揭陀国の因陀羅勢羅<sup>インド</sup>河山の東峰にある伽藍の前に建てられた雁塔とよぶ卒塔



慈恩寺の大雁塔（西安）

婆を實現し、この雁塔の由緒に注目し、慈恩寺の塔に雁塔の名をつけたのである。玄奘が書いたインド仏跡旅行記『大唐西域記』巻第九に摩揭陀国の伽藍と雁塔がつぎのように記される。

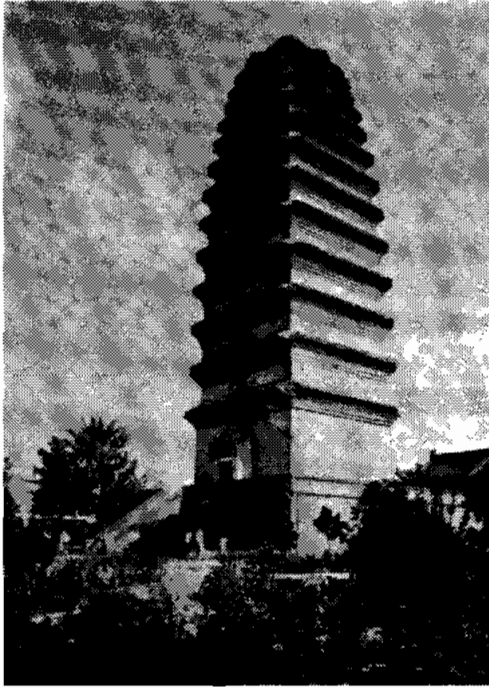
昔、この伽藍では小乗を学習していた。小乗は漸教である。それで三種の淨肉を免除していた。この伽藍は小乗の教えに遵い、この習慣を失ってはいなかった。しかし、後々に三淨の肉は時には手に入らないこともあった。ある比丘が散策をしている時に、ふと雁の群れが飛んでいるのを見て、戯れに、「今日は僧たちに食事は十分ではなかった。摩訶薩埵は（もし雁に化現していられる

ならば、その肉を施される）今まさにその時であることを知られるべきである」と言った。その声はまだ終わらないうちに一匹の雁が後戻りして、ちょうどその僧の前に身を投じて自殺してしまつた。比丘はこれを見て詳しく僧たちに話した。この話を聞くものは悲しみ、みな互いに、「如来は諸種の法門を設けて人々を機に臨み指導されましたのに、私たちは愚かにも漸教を遵奉してしまいました。大乘は正理です。今までの習慣を改めて仏のみ教えに従うべきでしょう。この雁は教訓を垂れ、りっぱに指導をしてくれました。その厚德を表彰しこの事跡を永久に伝えるべきでしょう。と言いあつた。そこで卒堵波を建ててその遺業を明記し、その死んだ雁を塔の下に埋めた。（水谷真成訳『大唐西域記』昭和四六年、平凡社発行、二二三ページ）

摩訶薩埵は大士（仏以外の衆生の中で最上位のさとり境地に達している者）と訳され、菩薩（自力・利他の大願大行を有する者）の美称で、右に引用した説話の中で、雁は仏教の真理を護持するのに役立つ。ばよいと生命を投げ出し、比丘らは「この雁は菩薩なり。何人か敢て食はん。自今已後、よろしく大乘によりて更に三淨の肉を食すべからず」といい、雁を靈塔に葬むつたというのである。玄奘は摩揭陀国の雁塔の由緒に心ひかれ、慈恩寺に建てた塔を大雁塔と名づけたのである。

## 二、大雁塔と小雁塔

西安の薦福寺に小雁塔がある。この寺は鐘樓の西南西にあり、鐘樓から南関正街を南進し、南梢門（南関正街と友誼東路の交叉点）のところで西に折れるとすぐ左側が寺である。この寺地にはもと隋の煬帝の邸があったが、のち唐の則天武后が文明元年（六八四）高宗の崩後一〇〇日に、ここに大献福寺を建て、天寿元年（六九〇）薦福寺と改称した。中宗が大きな手入れを加え、神龍年間（七〇五―七〇六）以来、經典の翻訳がここで盛んに行なわれ、著名となった。景龍年間（七〇七―七〇九）官人らが財を集めて一五層の塔を建てた。これが小



薦福寺の小雁塔（西安）

雁塔である。その名は慈恩寺の大雁塔にならってつけられ、規模が小さいので小雁塔と呼ばれた。

関野貞氏の論考「慈恩寺大雁塔と薦福寺小雁塔の彫刻図様」（『支那の建築と芸術』岩波書店、昭和十三年）によって両塔の規模や内部設備などを見ておこう。小雁塔の平面は方形で、初層の広さは方三七尺一寸七分（一一・二六メートル）をはかり、今は上の二層が壊れ一三層だけ残る（高さは四三メートル）。各層の高さは初層が最も高く、第二層以上はいちじるしく低く、且つ高さが少しずつ遞減している。各層の広さは減縮の度が少なく、第三・四層が少々ふくれ、秀麗な輪郭を呈する。

初層の正面に入口を開き、中心に方一三尺四寸七分（方四・〇メートル）の室がある。もとは前後に入口があったが、今は後方をふさいでおり、昔は上層までのぼることができたらしいが、今は各層の床がなく、最上層の屋根まで突抜けている。初層の内部正面の仏壇上に厨子があり、内に菩薩像を安置し、左右に各五体の仏像が並び、その上に棚のように持ち出し正面に釈迦三尊をまつり、左右に六羅漢の像を安置している。

大雁塔が五層から七層に改められた経緯について、関野貞氏の論考（前掲）の記述をまとめるとつぎのようになる。玄奘が建てた塔の基壇は方一四〇尺（方約四二・四メートル）で、基壇と五層および相輪を合わせた全高は約一八〇尺（約五四・五メートル）で、最上層は石を用

いて室を造り、内に太宗撰文の大唐三蔵聖教序碑と高宗撰文の大唐三蔵聖教序記碑を立てた（ともに□遂良の筆）。ところが塔は博表土心（内部は土を以て築き、外面だけ博を貼りつけた）であったので草や木が生え、しだいに壊れてきた。そこで則天武后の長安年中（七〇一—七〇四）、基壇をそのままとし、塔身全部をこぼち、新たに西域の卒堵波の制を模し六層博築の塔婆を建てた。塔身の初層は方八三尺で、全高の目測は約二〇〇尺（約六四メートル）である。各層の大きさと高さはしだいに減縮し、落着いた外觀を呈する。軒の部分は博を積み出して形づくっており、屋根が博のままであったかどうかは、今は草や木が生えているので分らない。相輪も一部しか残っていない。初層では中央に方形の室があり、四方に長い入口を開いており、中央の室から木の階段をのぼれば最上層に達する。初層正面の入口の左右に別の入口を開き、その奥に太宗と高宗の撰文の碑が立ててあり、再築のとき最上層からここへ移したのである。

関野氏の論考では、大雁塔が長安年間の改修で六層とされたままの姿で今日まで存続していると記すが、長安年間の改修ののち、唐代の間に七層となり、現在われわれは七層の姿を見ているのである。望月信亨編『仏教大辞典』の「雁塔」の項に「（玄奘は）西域の制度に倣ひて五層とし、相輪露盤を設け、各層に皆舍利を置き、上層は石を以て室となす。」と記し、太宗と高宗の三蔵聖教序（記）碑について述べ、ついで「後長安年間、東夏の剝表の旧式に依りて塔を改造し、更に一

層を加へて六層となせり。尋いで唐代に七層となり、（章八元顯慈恩寺塔詩に十層とあり。又西安府志所引の遊城南記には、十層の塔、兵余に七層を存するのみとあり）五代長興年間再修して面目を一新し、宋熙寧中、火災に罹り、明天順年間、清康熙年間重修を経て以て今日に至れり。」と述べている（第一巻、四七一—四七二ページ、昭和八年、世界聖典刊行会発行）。章元八の詩や「遊城南記」に記すところが正しいならば、大雁塔は七層となる前に十層であった時期が存したのであろうか。

岑参の詩「与高適・□扈同登慈恩寺净因」（高適・薛据と与に慈恩寺の浮図に登る）では、七層の姿を詠じている（第8句）

- |          |    |          |
|----------|----|----------|
| 1 塔勢如湧出  | 塔勢 | 湧出する如く   |
| 2 孤高聳天宮  | 孤高 | 天宮に聳ゆ    |
| 3 登臨出世界  | 登臨 | 世界を出で    |
| 4 磴道盤虚空  | 磴道 | 虚空を盤る    |
| 5 突兀庄神州  | 突兀 | として神州を庄し |
| 6 崢嶸如鬼工  | 崢嶸 | として鬼工の如し |
| 7 四角礙白日  | 四角 | 白日を礙げ    |
| 8 七層摩蒼穹  | 七層 | 蒼穹を摩す    |
| 9 下窺指高鳥  | 下窺 | して高鳥を指さし |
| 10 俯聽聞驚風 | 俯聽 | して驚風を聞く  |
| 11 連山若波濤 | 連山 | は波濤の如く   |

- 12 奔走似朝東 奔走 東に朝するに似たり  
 13 青松夾馳道 青松 馳道を夾み  
 14 宮觀何玲瓏 宮觀 何ぞ玲瓏たる  
 15 秋色從西來 秋色 西從り來り  
 16 蒼然滿関中 蒼然として関中に滿つ  
 17 五陵北原上 五陵 北原の上  
 18 万古青濛濛 万古 青濛濛  
 19 淨理了可悟 淨理 了として悟る可く  
 20 勝因夙所宗 勝因 夙に宗とする所  
 21 誓將挂冠去 誓つて將に冠を挂けて去り  
 22 覺道資無窮 覺道 無窮に資せんとす

(前野直彬注解「唐詩選」上、

岩波文庫、五〇―五二ページ)

前野氏の「唐詩選」(上・中・下)は、詩句の注釈と詩全体の通釈を掲げるほかに、下巻に「唐詩選詩人小伝」を掲げておられるので、詩の内容や詩が詠まれた背景などを知るのに大変参考になり、唐代の詩に親しみをもつことができる。その「小伝」によると、岑参(七一五―七七〇)は荆州江陵の人(一説に南陽の人)、天宝三載(七四四)の進士で、安西・河西などの節度使の幕僚となり長く塞外に勤務し、安祿山の乱のさい鳳翔(陝西省)にあった肅宗の陣に駆つけ、杜甫らの推薦で右補闕に任ぜられた。

ところで前野直彬氏は第4句の「磴道」に注釈し「石段の道。塔の入口まで登る石段のことであろう」といい、第4句を通釈し「塔へ至る石段はうねうねと、大空を旋回しているように見えるほどだ。」と記しているが、私は注釈と通釈がともにおかしいと考える。諸橋轍次著「大漢和辞典」に「磴」について三つの読みかた(訓)をあげ、(1)よろめく(よろよろする)、(2)ふむ(登に同じ)、(3)のぼる(登に同じ)、熟語として「磴踏」トウタフ(ふみだん)を掲げている(巻十の九五三ページ、昭和三三年、大修館書店発行)。岑参の詩にみえる磴道は諸橋辞典の(2)または(3)の意味をもって解釈するのがよく、大雁塔の初層の内部から最上層まで登る階段をさし、螺旋状につけられているので「盤る」と詠じているのであり、約六四メートルの高所にまで螺旋状の階段を登るから「虚空を盤る」と詠じたものと思う。

私は昭和五十五年に西域学術訪中団(団長横田健一氏)に参加し、西安に三泊したが、七月二十五日に大雁塔に登った。息切れがし、途中で数回休まねばならなかったが、高所から西安の郊外まで遠望することができた。

岑参の詩は、第1句から大雁塔の高くそびえていることを詠じており、第2句の「孤高 天宮に聳ゆ」や第3句の「登臨 世界を出で」につづく第4句にみえる「□道 虚空を盤る」という意味も高所に登ることに関連している。前野氏の解釈では、塔の高いことを述べる第3句と第5句とのあいだに塔の入口へ至る石段のことが介在すること

になるので、すぐれた解釈といえない。また塔の入口までの石段がうねうねとしているとか、大空を旋回しているようにみえるとか通釈するのは大袈裟であり、じっさいと合わない。

### 三、大雁塔初層楣石線刻仏殿図

大雁塔初層西面入口上部の楣石には、仏殿内における釈迦説法の図が陰刻されていることが関野貞氏によって発見された。すなわち五間単層四注の仏殿内の中央に説法する釈迦は蓮華座の上に趺坐し、その前方に香炉が置かれている。釈迦の左に九人の菩薩、右に八人の菩薩が蓮華座の上に侍し、仏殿の左右の軒廊内に各二人の菩薩が立つ。関野貞氏はこの仏殿図の建築様式が奈良時代の寺院建築の様式に共通するところが多いことをつぎのように指摘された。

(1)線刻図中の仏殿は正面五間で、最も前方の一系列の柱間が壁をつけずに開放されており、奈良・平安時代の大極殿の場合にも同じである。

(2)柱は円形で長く、頂部の肩を少しく丸く落としているのは唐招提寺金堂の柱と同じである。

(3)軒は二重椽で、地椽は丸く飛檐は角になっており、これは薬師寺東塔や唐招提寺金堂などと同様である。隅木に風鐸をかけているのも当時の日本の仏殿と似る。

(4)屋根は四注造(寄棟造)で、唐代に最も重要な殿宇の屋根は四注とされ、入母屋造と切妻造がそれにつぐ。奈良時代の大極殿・東大寺大仏殿・唐招提寺金堂・興福寺金堂なども四注の屋根をもつのは唐制の影響である。

(5)仏殿図の屋根は本瓦葺で、大棟の両端に鴟尾をあげているが、唐招提寺金堂の鴟尾と同形式であるのは興味ぶかい。

関野氏は右のような共通点をあげるとともにつぎのことを注意された。唐代の木造建築の遺例がなく、唐代の木造建築の様相を研究するには日本の奈良時代のそれを調べなければならないが、しかし奈良時代の建築は唐代様式の模写であるか、あるいは多少日本趣味によって変化しているのかについては、唐側の実例がないので的確に判断できなかった。幸いに大雁塔楣石の線刻図に唐代建築の一斑を知る図像を得ることができ、これは一つの転機を画することとなった、と(前掲「慈恩寺大雁塔と薦福寺小雁塔の彫刻図様」。もと『建築雑誌』第二九輯第三四七号・第三四八号、大正四年十一月・十二月に掲載)。

唐招提寺の南門に立って金堂をながめて撮影した写真と、大雁塔仏殿線刻図を並べてみると、唐招提寺金堂が七間四面であるのに対し大雁塔仏殿図の正面が五間である(奥行は四間かどうか読みとりにくい)という相違点をこえて、両者の建築手法が一致しているのは興味深く、唐の文化がいかに強く多く奈良時代に影響を及ぼしているかを考えさせられる。

#### 四、大雁塔と行基建立大野寺土塔

前節(三) 大雁塔初層楣石線刻仏殿図)で見えてきた唐文化の日本に対する影響の大きさを念頭におきながら、つぎに取上げたいのは鹿谷寺(大阪府南河内郡太子町山田字金山谷二〇六五)の石造十三重塔である。寺跡は二上山の雌岳から西南にのびた尾根の先端部を南北に横切って開さく削平した平地にあり、この付近は二上火山から噴出した凝灰岩(大坂の石)の石切場で、つぎのような石窟や石塔がみられる。

(1)石窟 十三重石塔の東側の石に如来坐像三体(蓮華座に坐し、頭光を負う)が線刻され、像高は約一・一五メートルで、この石窟は寺の金堂の役割をつとめたといわれる。

(2)石造十三重塔 基底部は一辺約一・六メートルの方形で、塔全体の高さは約五・二メートル。

(3)石造小塔 十三重石塔の南方崖下にあり、方尖碑状を呈し、高さ約一・六九メートル。

(4)岩塊に浮彫りされた仏像 十三重石塔の西南。仏像は半肉彫りの立像。

右の(1)(2)(3)は地山の石を彫り残して造られているという特異なものである。(3)石造小塔より南方の崖下の平地から和同開珎や奈良時代の土器が出土し、天平宝字五年「造法華寺金堂所解」に「五十四貫文大坂白石一千九百六十五顆功」と記される大坂白石はこの石切場か

ら採取されたものである(竹内理三編『寧楽遺文』中の四八一ページ)。右の(2)石造十三重塔の形は薦福寺小雁塔に大層近似しており、小雁塔が奈良文化に及ぼした影響のひとつと考える。

さて、玄奘が日本仏教に大きな影響を与えたことは、彼のインド留学が一六年の長期にわたり、大部な経典を持ち帰り漢訳したことなどから当然の結果であるが、また玄奘に直接師事した道昭(白雉四年、六五三年入唐)のような僧がいたから玄奘の影響がいっそう日本に及んだ。道昭は玄奘の住房に住むことを許され、破格の優遇を受けた。あるとき玄奘は道昭につきのようについた。自分が西域で飢えたとき(インドに赴いたさい)ひとりの僧が私に梨を呉れ、それを食べたおかげで氣力を健全に回復することができたが、汝はその梨を呉れた僧である、と(『統日本紀』文武四年三月十日条、道昭の伝記)。玄奘の言葉は道昭が大変に氣にいらりの弟子であったことを物語る。

道昭は唐から帰り、元興寺の東南隅に禅院を建て、弟子を教えるとともに各地をめぐるって井戸を掘り、津に船・橋をそなえ、社会事業を展開しており、行基は伝道と社会事業をバラレルに進めたことから推測すると、行基は道昭に師事したと考えられる。行基は和泉国の大野寺(神亀四年、七二七建立)に土塔を造っており(堺市土塔町の大野寺に残る)、この塔の材質と形式が法隆寺五重塔や薬師寺三重塔などの木造様閣建築にしたがわずに、土製の截頭方錐形(ピラミット)のように正四角台錐とし、頂上をすこし切りとったところへ宝珠をのせて

いる)としたのは、玄奘が建てた大雁塔の材質と形式にならったのではあるまいか。

行基の活動と施設造りについて、玄奘↓道昭↓行基というつながりを考えることができるが、玄奘は西域から持ち帰った罽子<sup>なべ</sup>を形見として道昭に与え、この罽子を用いて「物を煎て病を養うに神驗あらざうということ無し」といっており(前掲『続日本紀』の道昭伝)、「西域」の語が道昭の伝記に二回みえるが、西域に多い土製の塔は玄奘がインド旅行のとき実見し、西域の土塔の制にもとづいて大雁塔を造っているわけで、このようにみてくると、西域の土塔は大雁塔に集約され、西域の土塔と大雁塔は道昭をとおして行基に知られていたと推定され、私は大野寺土塔が西域の土塔と大雁塔を結ぶ線上に成立したと考えたい。

## 五、大野寺土塔の原形

インドのストゥーパ(仏塔)の系譜をひく大野寺土塔は、日本で木塔が塔の大部分を占める中において、きわめて特異であり、重要な意義をもつ建造物であるが、昭和二十七年に破壊されかかったことがあり、その受難を買収保存によって切りぬけた注目すべきいきさつをもっている。

大阪府教育委員会編『大阪府の文化財』(昭37)は「史跡大野寺土

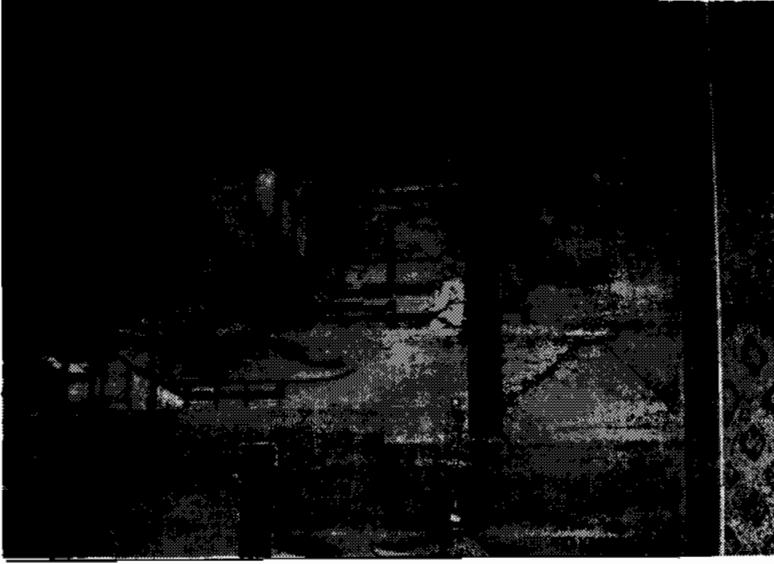
塔の保護」の項に「大野寺の東南に、当時の考古学界で土塔方形墳などと呼ばれ、古墳と認められていた特異な方錐状土山があったが、昭和二十七年頃になってその東北隅角から採土破壊が頻りとなった。それが稀有害な塔婆形式の土塔そのものであることを確認した本府教育委員会では、その保存に努力を傾注した。その土壌および敷地の買収について府費予備費の支出を画し、幸い十月十日には土地所有者および土壌買収者から、買収の契約を了するまでにこぎつけ、永劫の保存を期しうることとなった。そして翌二十八年一月十七日には史跡の仮指定をおこなった。ついで文化財保護委員会あて史跡の本指定を申請し、同年三月三十一日付で官報告示があった。これが本府において、またおそらく全国的にみても地方庁が史跡等の買収保存に踏み切った最初の事例であった。」と記している。

この土山を土塔方形墳と呼ぶ説は誤りで、土盛りの仏塔(塔婆)であることはすでに述べたので(『行基』人物叢書、昭34、吉川弘文館)、ここでは繰返さない。

『大阪府の文化財』はまた「大野寺土塔の実測調査」の項で「堺市土塔町の真言宗大野寺から、道をへだてた東南の畑中に、土塔<sup>どち</sup>または塔山と呼ばれる方錐状の堆土がある。この寺は神龜四年、僧行基によって建立された大野寺の法燈を継ぐものであり、この堆土は、家原寺に所蔵する重要文化財『行基菩薩行状絵伝』の大野寺の部分に、その原形の描きとどめられている土塔そのものである。昭和二十七年、大

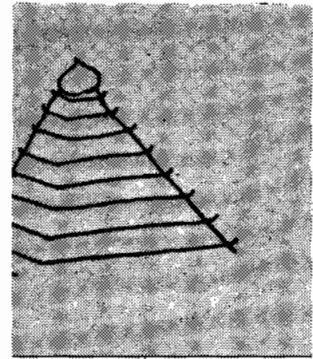


「大阪府教育委員会ではこの土塔の緊急保護措置として、史跡仮指定をおこなったが、そのため実体を把握する必要がある、堅田直氏に囑して、寺跡一帯と土塔そのものの地形測量をおこなった。現状では土塔の東北隅角は、はなはだしく採土せられ、また周囲の畑地耕作による蚕食



行基絵伝に描かれた大野寺土塔（向かって右下）

があつて、その形態を損じ、高さ九呎、東辺長五二呎、西辺長四八呎、南辺長五七呎、北辺長五三呎を測るが、元来は辺長五〇呎強を有したことが推測された。そしてその断面に現われた柱状土



大野寺土塔（行基絵伝）の模写図

層から、その層数は十三重であつたことも確認された。」と記している。「行基菩薩行状絵伝」（以下「行基絵伝」と略称）は室町時代に家原寺住職の行覚が画師に命じて描かせた

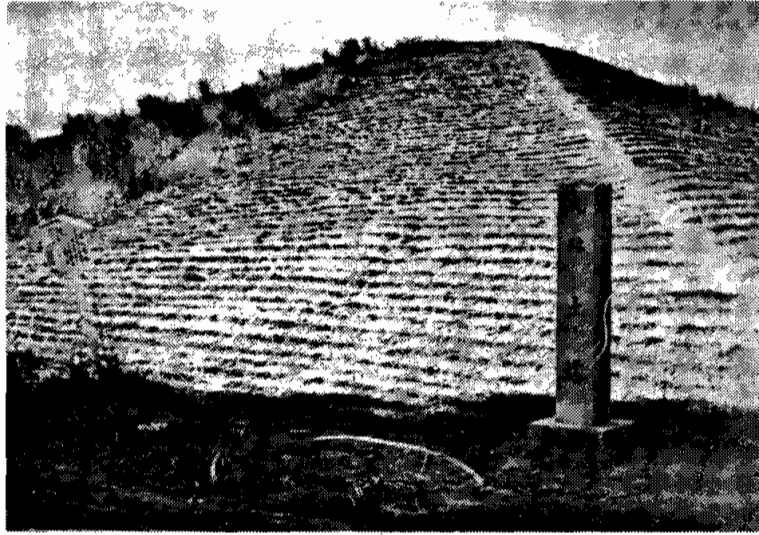
もので、絹本着色、三幅から成る。「行基絵伝」は土塔の説明として

短冊型の囲みのなかに「大野寺御年六十歳神龜四年十三重土大塔在之」と記し、寺が神龜

四年（行基六十歳のとき）の建立で、土塔の層が十三重との意味である（土塔が十三重であることは寛政三年（一七九一）「土塔山大野寺改帳」や天保十四年（一八四三）『泉州大島郡寺院覚』にもみえる）。

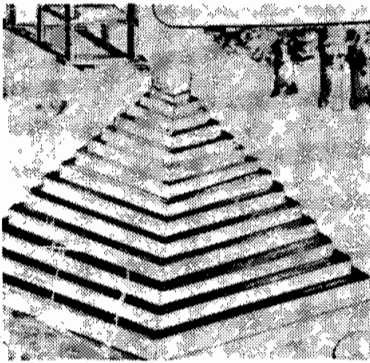
「行基絵伝」の土塔の図では、屋根の横線が七本しかみえず、十三重というのに一致しないが、これについては、(1)大野寺と香林寺の塚に霞が描かれており、土塔の下部が霞によって見えなくなっているところか、(2)画師が煩雑をさけるため十三本の横線を引かず七本に略したと解するか、いずれかであるが、(1)の解釈の方がよいと思う。

ところで「大阪府の文化財」に昭和二十八年の地形測量によって土塔の断面に現われた柱状土層から、その層数は十三重であることが確認された」と記され、掲載された写真に柱状土層にあたるものがみえる



大野寺土塔の現状

が、その柱状土層によってどうして土塔全体の十三層であることがいえるのか、説明がほしいと思う。  
つぎの問題は、土塔の表面にどのように瓦が葺かれていたかである。



大野寺土塔の原形推定図  
(岸谷勢蔵画)

土塔の原形は、石田茂作氏の分類用語における段塔に属する。瓦は『行基絵伝』の土塔図にみられる横線（七本がみえるけれど、じっさいは十三本あり、霞によって六本がみえない。前述）の部分に平瓦と丸瓦を葺いていたと考える。森浩一氏は土塔の現状を調査し、普通の寺院の建物では必ず多数の鍍瓦や宇瓦をとまうのに、土塔の表面と周辺では鍍瓦や宇瓦は非常に少いといわれる（「大野寺の土塔と人名瓦について」『文化史学』一三、昭32）。瓦の少ないのは段塔だからである。

画家の岸谷勢蔵氏が土塔の地形測量の説明にもとづいて、土塔の原形を図示されたものは段塔の形を呈しており、それでよいと思うが、なお考えなければならない問題がある。というのは、『行基絵伝』に土塔の頂上から降る斜線と屋根の横線の交点に突起（ヒゲ状のもの）がみえるのは何をあらわすかである。それは土塔各層の四隅が強い反りをもつようすを描いたものと私は思う。

ここで石田茂作氏の「中国の仏塔」（一）模写図（『日本仏塔』一一ページ、昭44、講談社）を借りてい

えば、⑦慈恩寺大雁塔(唐)七重壇塔、⑧薦福寺十三重壇塔(唐)がともに四角形の塔で、各層の四隅は反りをもっていないが、⑩定県開元寺八角十一重壇塔と⑫江蘇省西林寺八角七重木壇塔(明)の八隅が強い反りをもっており、このような隅の反りを大野寺土塔がもっていたのを『行基絵伝』に突起(ヒゲ)で表現していると考ええる。

旧著『行基』(一八九ページ、昭34、吉川弘文館)で、降り棟の突起が行基式丸瓦(上端よりも下端の幅が大きい)を用いたことに起因すると述べたのは失考で、ここに訂正したい。

石田茂作氏の『日本仏塔』は大著であり、塔を考える場合に必見の書といわねばならず、学恩に浴していることを謝すだけである。ところで石田氏は大野寺土塔を平安時代のものとしてとりあげ「大野寺土塔遺跡(平)」という見出しをつけ(平は平安時代の略)、解説にも「大野寺址は旧和泉国泉北郡土師村にあり、人名を籠書した瓦が多数出土することでお有名である。夙に焼類して伽藍配置は判らないが、発見瓦からの推察では平安時代初期の寺址であろうといわれる。この寺址の一隅に土塔山と称するところがあり、以前は巨木が鬱蒼と繁茂していたが、終戦後土建業者により山が崩されかかった。よって大あわてで土地の文化人・府教育委員会等が騒いで破壊の難をやっと免れたが、その時既に遅く樹木は大部分伐採され山も一部土取りされた。然しそれによって判ったことは山土の下に瓦が屋根を葺いたような姿で土中に埋まっていたことである。瓦は前掲の頭塔からも発見されて

いる。依って思うに、土塔は階段式の方錐形に作られ、各層土積みの上に瓦を葺いていたのではあるまいか。そう考えてくるとこれもまた段塔の一遺跡といえるのである。」と述べ森浩一氏の論文(前掲)を参照したと記しておられる。大野寺土塔の原形を段塔とされ、その考えかたがよいと思うが、時代を平安時代とされるのは誤解で、奈良時代としなければならぬ。

石田氏は『日本仏塔』で勝尾寺八天石蔵を塔の一種としてとりあげておられるが、その分類の仕方にも問題がある。これについて深入りすることを避け、一言するだけにとどめ、別の機会にゆずりたい。